



第57回日本老年社会科学会 自主企画フォーラム
コミュニティにおけるアクションリサーチ

都市部における高齢者の 社会的ネットワークの形成に関する介入研究



桜美林大学老年学研究科
芳賀 博

目的



社会的ネットワークは、高齢者の健康やQOLと密接に関連することが知られている。しかし、社会的ネットワークの構築に関する問題解決型の実践的研究はほとんどない。

①都市部における在宅高齢者の「地域社会での役割」遂行を促すプログラムを市民、行政、地域包括支援センター、研究者の協働で作成する。

②それらの実践への応用が地域高齢者の社会的ネットワークの構築及び健康増進にどの程度影響するのかを明らかにする。

対象地域

調査地域：神奈川県座間市

総人口 13万人

高齢化率 19.0% (2011年1月現在)



本研究は、座間市の中から地域特性の似通っているA、B2地区を選び、A地区を介入地区、B地区を対照地区と設定した。

調査対象(アンケート)：両地区に住む65歳～79歳の全員

A: 介入地区577名、B: 対照地区576名

3

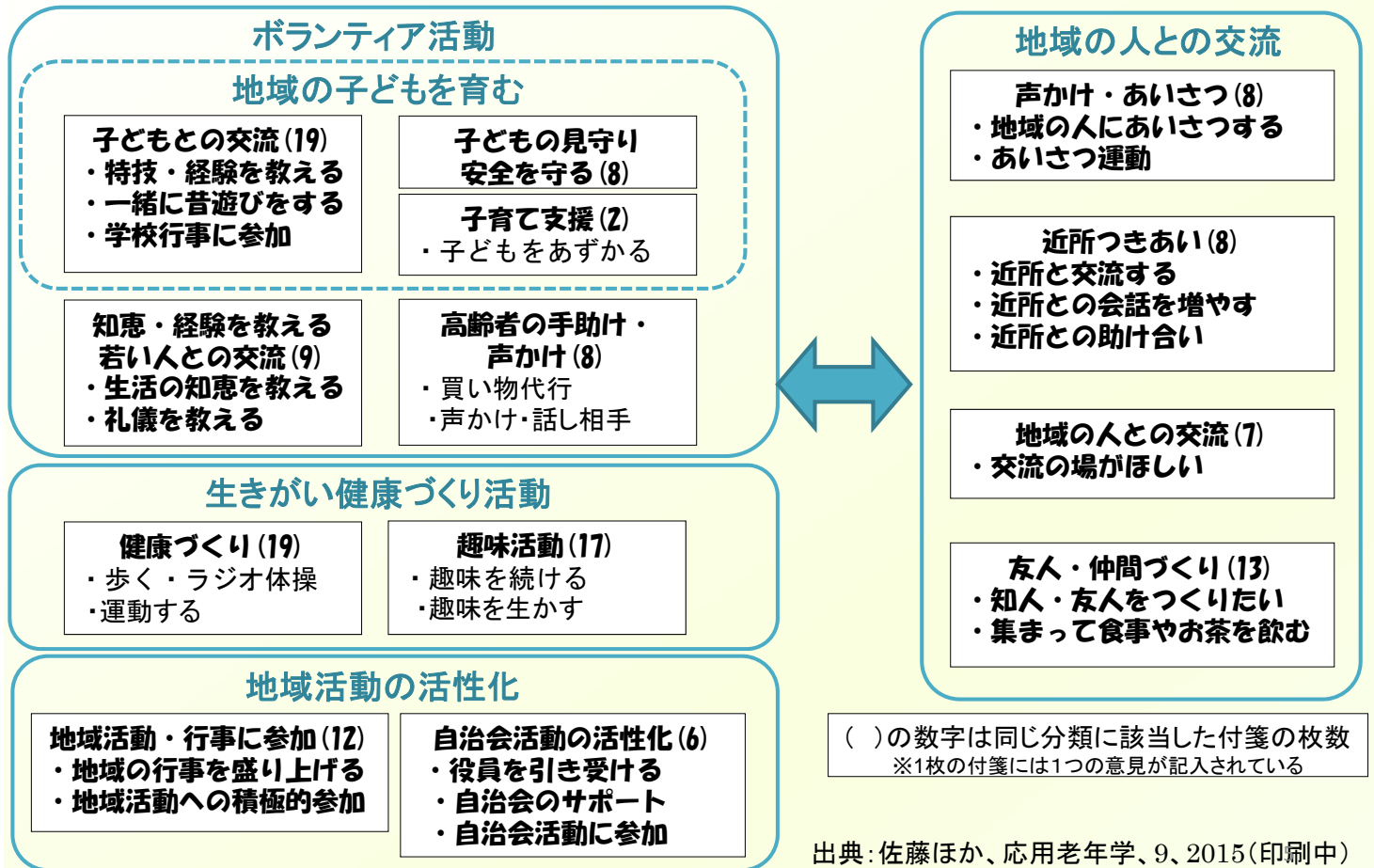
取り組みの流れ

		初 回 調 査	
		介 入 地 区	対 照 地 区
2010年	1月		
	5月	キーパソンに対するFGI(課題の共有)	
	6月	地域組織への研究説明会(ワークショップへの参加要請)	
	7~9月	第1~2回のワークショップ	ちいき通信発行(月1回)
2011年	11月	第1~4回プロジェクト会議 (4事業の決定とウォーク事業の具体的な準備)	
	1月	◆ウォーキング事業開始(毎週木曜日実施)	
	2月	第5~15回プロジェクト会議 (ウォーク事業の継続と振り返り、 塾事業・サロン事業の計画・振り返り)	
	5月	ウォーク事業参加者によるワークショップ (ウォークの改善点・塾やサロンについて意見交換)	
	12月	●7月サロン開始(以後5回開催)	
	2013年	1月	追 跡 調 査
6月		プロジェクトメンバー(住民)へのFGI(事業の振り返り)	

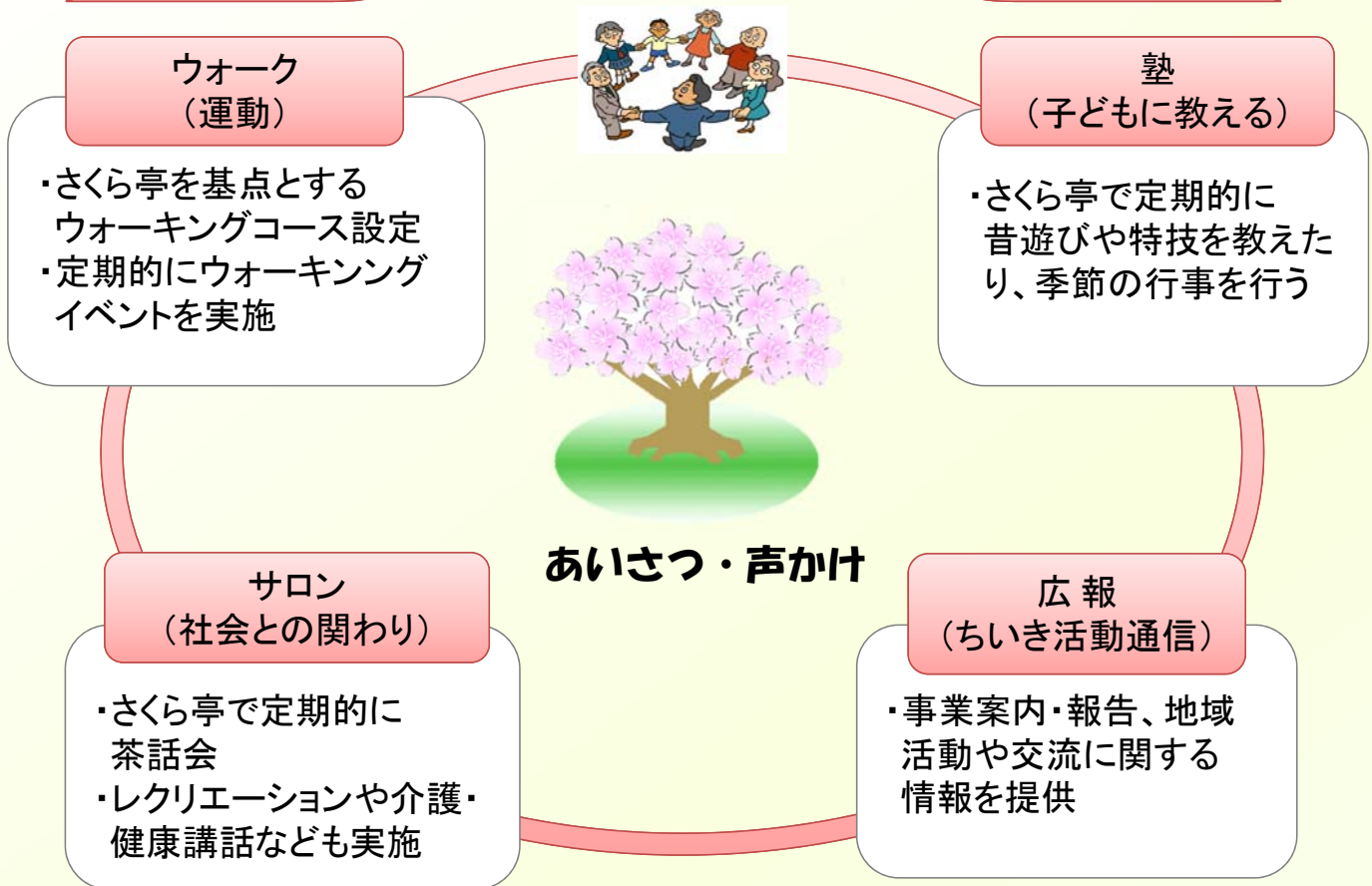
4

高齢者に期待されている役割・活動！

～ 第1回ワークショップ結果 ～



SAKURAプロジェクト ～ 地域のふれあいづくり ～



住民と協働で取り組むワークショップ、プロジェクト会議及び実践の意義

- プロジェクトへの関与者のエンパワメントを引き出すことに効果的
→活動の継続と自主化を促す
- エンパワメントの過程には、「参加」ー「対話」ー「問題意識と仲間意識の高揚」ー「行動」の段階がほぼ共通してみられる(中山、2007)

7

情報の整理の仕方(活動経過表)

年月日	研究者と住民・関係機関の関わり		その他の動き	特記事項 (反応や決定事項など)
	住民との関わり	関係機関との関わり		
2011年4月5日		介入地区担当地域包括支援センター職員へのインタビュー ・地区の様子・活動状況 ・利用可能なネットワークなど		職員は地域づくり活動への関心も高く、研究者と地域との媒介役として、また積極的に研究事業に関与してくれることが期待された。
5月20日			行政が介入地区在住の有力者A氏と面談 ・地域特性の把握 ・役割設定に関係する社会資源の情報収集 ・キーパーソンの紹介	介入地区で主体的に活動しているまちづくりの団体(B会)とメンバーを紹介してもらう
5月29日	介入地区キーパーソン3人へのグループインタビュー(B会) ・地区の様子・活動状況 ・利用可能なネットワークなど			B会は様々な団体と連携しながら積極的に活動している。 ⇒この3人が介入時のキーパーソン・組織となり得ると思われた。

8

活動経過表に記載された事項の詳細な記録(例) 「キーパーソンへのグループインタビュー」の場合

【フォルダー名：20110529_グループインタビュー】

- インタビュー計画
研究者・行政の役割分担、リサーチクエスチョン、開催場所・時間
- 配布資料
- 参加者名簿
- 発言の逐語録
- 逐語録の分析結果
- 写真
- フィールドノート
研究者の気づき、参加者の反応、場の雰囲気等

9

プロセス評価表(1)

出典：安齋ほか、応用老年学、9、2015(印刷中)

	年月日	会議 プロジェクト 事業	プロジェクトメン バー(住民) の反応	研究者からみ たプロジェクト の動きや研究 者の働きかけ	ステークホルダー(プロジェクトメンバー)									その他の ステークホルダー			
					Aさん	Bさん	Cさん	Dさん	Eさん	Fさん	Gさん Hさん	Iさん	行政	包括	研究者		
①無関心〜興味期	2011 10月初旬				↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
	11月初旬	第1回 プロジェクト 会議			↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
	11月中旬	第2回 プロジェクト 会議			↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓

10

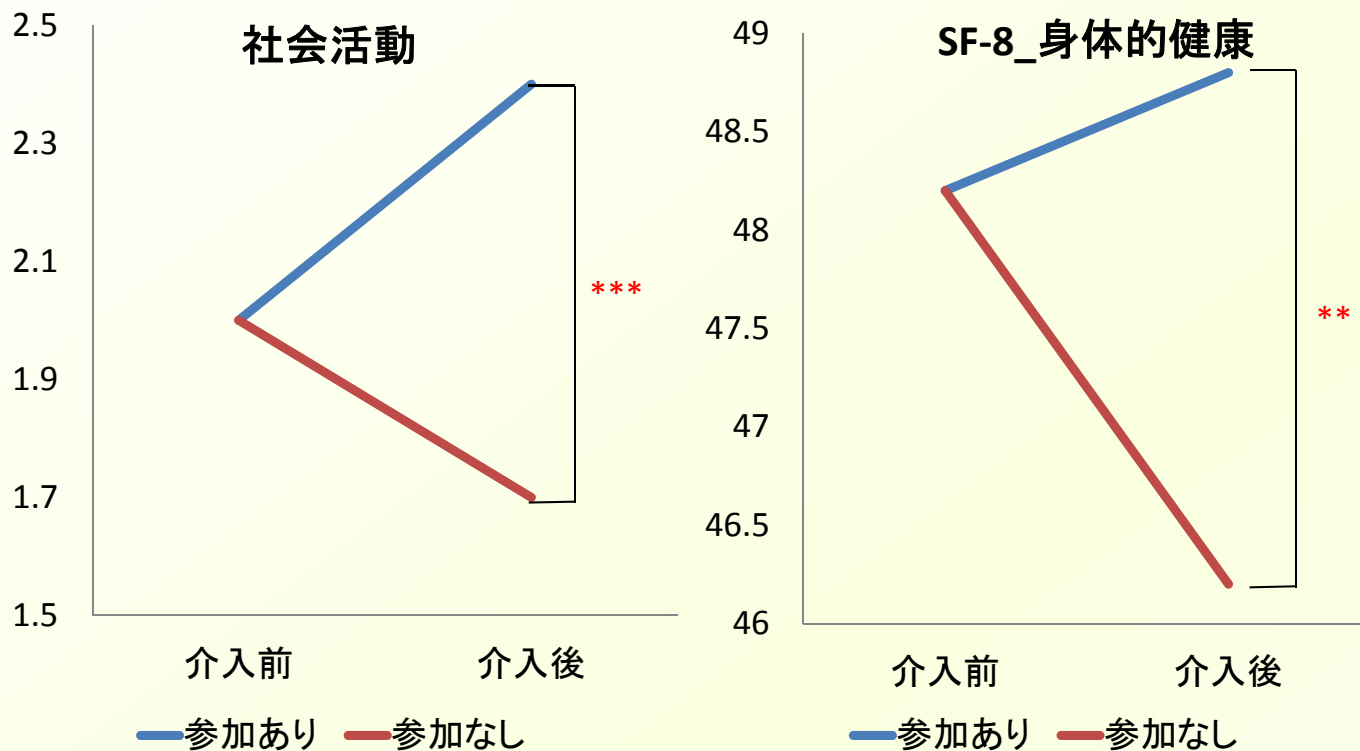
プロセス評価表(2)

出典: 安齋ほか、応用老年学、9、2015(印刷中)

	年月日	会議プロジェクト事業	ステークホルダー(プロジェクトメンバー)							その他のステークホルダー			
			Aさん	Bさん	Cさん	Dさん	Eさん	Fさん	Gさん Hさん	Iさん	行政	包括	研究者
⑤ 自主活動開始期	6月初旬	ウォーク開始時刻変更	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓			
	7月初旬	第10回プロジェクト会議	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓			
		サロン開始 (~12月まで5回実施)	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓			
	7月下旬	第11回プロジェクト会議	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓			
	9月初旬	第12回プロジェクト会議	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓			
	10月中旬	第13回プロジェクト会議	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓			
	11月初旬	第4回イベントウォーク	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓			
⑥ 自主活動期	11月初旬	第14回プロジェクト会議	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓			
	12月中旬	第15回プロジェクト会議	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓			
	2013 3月	研究期間終了	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓			
			↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓			

11

効果評価(1): 活動への参加の有無別に見た介入前後の変数の変化の比較

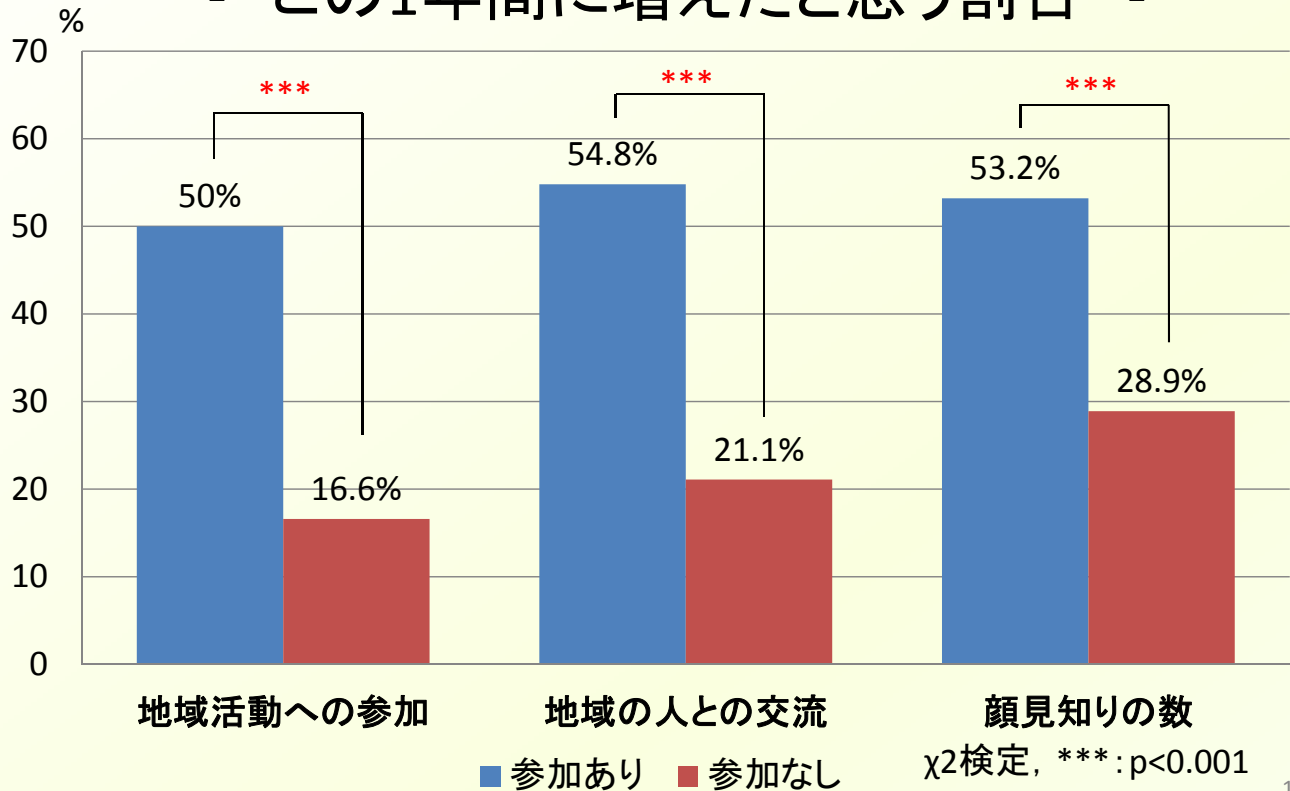


年齢, 性別, 各従属変数の値を共変量として一般線形モデル(反復測定)交互作用 **:p<0.01, ***p<0.001 (安齋, 2015)

12

効果評価(2):活動への参加の有無別に見た 地域社会との交流の主観的変化

- この1年間に増えたと思う割合 -



出典:安齋ほか、応用老年学、9、2015(印刷中)から作成

13

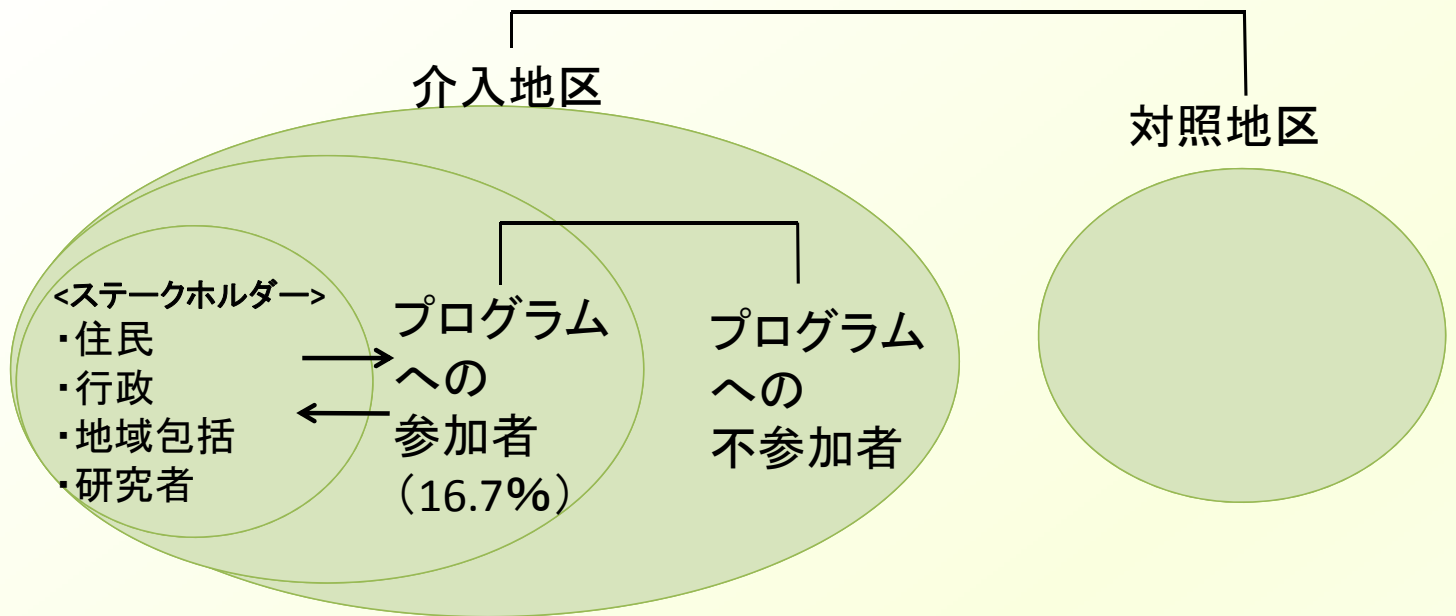
効果評価(3):プロジェクトメンバー(住民)から みた取り組みの効果

カテゴリー	コード
自主活動として 継続した	自主活動として継続した
	ウォークは地域のニーズにあった
地域のつながりが 広がった	ウォークで住民に声かけをしており、啓発になっている
	子ども会とつながりが持てた
	住民同士が話し合う機会がもてた
地域の安全・美化 に効果があった	ウォークは防犯や環境美化の効果がある
取り組みに対する 満足感がある	取り組みに対して満足感がある
	研究者のトップダウンの取り組みでなかった

14

出典:佐藤ほか、応用老年学、9、2015(印刷中)

まとめ(1)



- 1) ウォーク事業の振り返りと継続を通じて、活動自体が深化していく様子が見えてきた。
- 2) 「塾」や「サロン」は、住民主体の活動が展開されたとはいえなかった。

15

まとめ(2)



- 3) ウォーク事業への参加者は、不参加者に比べて「社会活動得点」「健康関連QOL得点」が増加し、「地域の人との交流」や「顔見知りの数」が増えたと回答する者も多かった。
- 4) しかし、介入地区と対照地区の諸変数の比較においては、有意な変化が見られなかった。
- 5) プロジェクトメンバー(住民)へのFGIでも、ウォーク事業への参加がポジティブな効果をもたらしたことが表明された。



共同研究者: 齊藤恭平(東洋大学) 佐藤美由紀(神奈川工科大学)
安齋沙保理(東京都健康長寿医療センター)

16